

各関係機関長 殿
病害虫防除員 殿

徳島県立農林水産総合技術支援センター
病害虫防除所長
(公印省略)

平成20年度農作物病害虫発生予察情報について

平成20年度農作物病害虫発生予報第6号を発表したので送付します。

平成20年度農作物病害虫発生予報第6号

平成20年7月31日
徳島県

I. 普通作物

普通期水稻

穂いもち

1) 予報内容

発生程度：「少」、発生量：平年より少ない(前年並)

2) 予報の根拠

(1) 7月後半の巡回調査では、葉いもちの発生量は発生圃場率が23.3%、発病度が3.0で、平年(52.2%、5.4)より少なめの発生であった。

(2) 7月25日発表の1ヶ月予報では、気温は高い確率が60%、日照時間は平年並または多い確率ともに40%と見込まれており、発生に中立的である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 葉いもちの発生が多い圃場では、使用基準を確認の上、粒剤の場合は出穂10日前までに、液剤の場合は出穂直前までに薬剤防除を行なう。また、出穂後曇雨天が続いた場合は穂揃期にも防除を行なう。

紋枯病

1) 予報内容

発生程度：「少～中」、発生量：平年並(前年よりやや少ない)

2) 予報の根拠

(1) 7月後半の巡回調査では、発生圃場率が23.3%、発病株率が6.5%で、平年(56.1%、15.8%)より発生が少なかった。

(2) 7月25日発表の1ヶ月予報では、気温は高い確率が60%、日照時間は平年並または多い確率ともに40%と見込まれており、やや発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 今後の発生に十分注意し、基幹防除を励行する。発生が多い場合には出穂直前防除を追加して、上位葉へ薬剤が十分かかるように散布する。

セジロウンカ

1) 予報内容

発生程度：「少」、発生量：平年並(前年よりやや少ない)

2) 予報の根拠

(1) 7月後半の巡回調査では、発生圃場率が63.3%、株当たり寄生虫数が0.2頭で、平年(80.8%、1.6頭)並～やや少なめの発生であった。

(2) 7月25日発表の1ヶ月予報では、気温は高い確率が60%、日照時間は平年並または多い確率ともに40%と見込まれており、発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 今後の発生に十分注意し、基幹防除を励行する。特に、苗箱処理剤による防除を行っていない圃場では、適期防除に努める。

トビイロウンカ

1) 予報内容

発生程度：「少」、発生量：平年並(前年よりやや少ない)

2) 予報の根拠

- (1) 7月後半の巡回調査では、発生を認めなかった(平年同時期は発生圃場率が4.5%、株当たり寄生虫数が0.01頭)。
- (2) 7月25日発表の1ヶ月予報では、気温は高い確率が60%、日照時間は平年並または多い確率ともに40%と見込まれており、発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 今後の発生に十分注意し、基幹防除を励行する。特に、苗箱処理剤による防除を行っていない圃場では、適期防除に努める。

コブノメイガ

1) 予報内容

発生程度：「少」、発生量：平年よりやや少ない(前年よりやや少ない)

2) 予報の根拠

- (1) 7月後半の巡回調査では、発生圃場率が3.3%、被害株率が0.3%で、平年(38.6%、4.3%)より少なめの発生であった。
- (2) 7月25日発表の1ヶ月予報では、気温は高い確率が60%、日照時間は平年並または多い確率ともに40%と見込まれており、発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 現在葉巻内で加害している老齢幼虫に対しては薬剤の効果が低いので、次世代の若齢幼虫を対象に防除する。防除適期は粒剤を施用する場合は発蛾最盛期、水和剤等を散布する場合には発蛾最盛期の7日後である。
- (2) 過肥田や肥料切れの悪い湿田で多発する傾向があるので、窒素質肥料の施用は控えめにする。

斑点米カメムシ類(アカスジカスミカメ、ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ等)

(7月15日付けで注意報発令中)

1) 予報内容

発生程度：「多」、発生量：平年より多い(前年並)

2) 予報の根拠

- (1) 7月後半の水田周辺雑草地における生息調査(1地点当たり捕虫網20回振り)では、捕獲地点率が79.2%、地点当たりの捕獲虫数が19.1頭で、平年(61.3%、8.4頭)より発生が多かった。
- (2) 7月25日発表の1ヶ月予報では、気温は高い確率が60%、日照時間は平年並または多い確率ともに40%と見込まれており、発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 斑点米カメムシ類の生息場所となる周辺雑草を、水稻出穂の10～15日前までに除去・処分する(但し、出穂直前の除草は本田内に斑点米カメムシ類を追い込むことになるので行わない)。
- (2) 出穂が早い圃場に集中して飛来する傾向があるので、周辺雑草地や本田での発生に注意し、発生を認めたら早急に防除を行なう。
- (3) 薬剤散布については各薬剤の登録内容を確認の上、液剤等で出穂期と乳熟期(出穂後約2週間頃)の2回防除を行なう。

サツマイモ

食葉性害虫(ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ等)

1) 予報内容

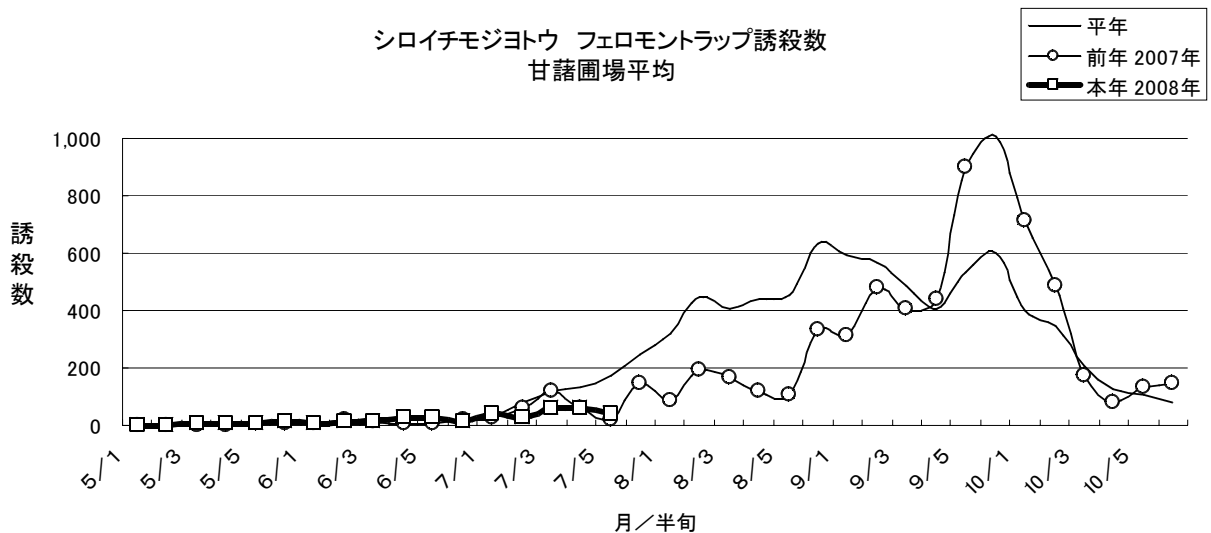
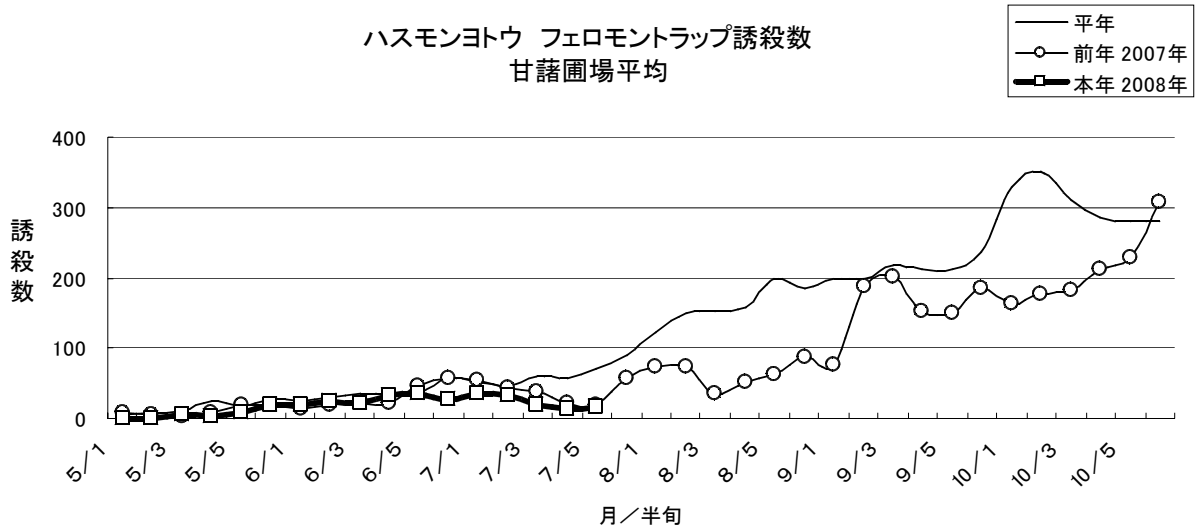
発生程度：「少～中」、発生量：平年並(前年並)

2) 予報の根拠

- (1) 7月後半の巡回調査では、食葉性害虫による被害発生圃場率が100%、被害度が25.0で、平年(88.2%、15.7)並～やや多めの発生であった。
- (2) 7月のフェロモントラップへの誘殺虫数(調査4圃場の平均)は、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウともに平年並～やや少なめで推移している。

[フェロモントラップ誘殺数]

月半旬	ハスモンヨトウ					シロイチモジヨトウ				
	2008年	2007年	2006年	2005年	平 年	2008年	2007年	2006年	2005年	平 年
7.1	35	54	40	188	51	43	27	8	22	29
7.2	32	43	47	119	47	24	59	13	25	79
7.3	20	39	45	98	59	62	117	20	71	117
7.4	12	23	120	99	58	58	60	60	37	134
7.5	15	18	99	144	70	41	23	70	45	173
7.6		57	89	142	89		145	39	66	244
8.1		73	150	92	122		88	34	87	319



(3) 7月25日発表の1ヶ月予報では、気温は高い確率が60%、日照時間は平年並または多い確率ともに40%と見込まれており、発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので、若齢幼虫時に徹底防除を図る。

ハダニ類

1) 予報内容

発生程度：「少～中」、発生量：平年よりやや多い(前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

- (1) 7月後半の巡回調査では、発生圃場率が33.3%、寄生葉率が2.0%で、平年(20.6%、1.8%)より発生圃場率がやや高かった。
- (2) 7月25日発表の1ヶ月予報では、気温は高い確率が60%、日照時間は平年並または多い確率ともに40%と見込まれており、やや発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。防除の際には、充分な量の薬液を散布する。
- (2) 同一系統薬剤の連用は薬剤抵抗性獲得の恐れがあるので避ける。

II. 果樹

カンキツ

ミカンハダニ

1) 予報内容

発生程度：「少」、発生量：平年よりやや少ない(前年並)

2) 予報の根拠

- (1) 県予察圃場における調査(7月22日調査、無防除区)では、発生を認めなかった(平年同時期は寄生葉率が13.2%、一葉当たり生息虫数が0.76頭)。
- (2) 7月前半の巡回調査では、発生圃場率が70.0%、寄生葉率が2.1%で、平年(65.6%、19.4%)より少なめの発生であった。
- (3) 7月25日発表の1ヶ月予報では、気温は高い確率が60%、日照時間は平年並または多い確率ともに40%と見込まれており、やや発生抑制的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。防除の際には、充分な量の薬液を散布する。
- (2) ミカンハダニは薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一系統薬剤の連用は避ける。

カキ

うどんこ病

1) 予報内容

発生程度：「中」、発生量：平年並～やや多い(前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

- (1) 7月後半の巡回調査では、発生圃場率が40.0%、発病葉率が10.8%で、平年(50.0%、7.3%)並～やや多めの発生であった。
- (2) 7月25日発表の1ヶ月予報では、気温は高い確率が60%、日照時間は平年並または多い確率ともに40%と見込まれており、やや発生抑制的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 今春、病斑が目立った園では、防除を徹底する。

果樹共通

果樹カメムシ類(ツヤアオカメムシ、チャバネアオカメムシ等)

1) 予報内容

発生程度：「少」、発生量：平年よりやや少ない(前年より少ない)

2) 予報の根拠

- (1) ツヤアオカメムシ、チャバネアオカメムシともに、予察灯への誘殺虫数は平年より少なめで推移している。

[ツヤアオカメムシの誘殺数]

月半旬	勝					浦					田				
	2008年	2007年	2006年	2005年	平 年	2008年	2007年	2006年	2005年	平 年	2008年	2007年	2006年	2005年	平 年
7.1	26	98	196	0	109	0	6	2	0	24					
7.2	19	64	148	0	63	4	7	4	1	41					
7.3	16	36	182	0	47	1	5	0	0	17					
7.4	9	41	62	0	46	1	12	2	3	15					
7.5	17	46	24	0	30	0	14	1	1	12					
7.6		30	93	0	43		13	1	0	14					
8.1		28	117	4	99		3	4	0	10					

[チャバネアオカメムシの誘殺数]

月半旬	勝					浦					田				
	2008年	2007年	2006年	2005年	平 年	2008年	2007年	2006年	2005年	平 年	2008年	2007年	2006年	2005年	平 年
7.1	2	51	80	0	127	0	91	4	0	109					
7.2	14	80	100	0	93	10	54	8	1	37					
7.3	4	130	48	0	76	3	58	2	3	70					
7.4	9	79	7	0	56	9	179	5	0	53					
7.5	8	133	10	0	74	1	80	1	4	40					
7.6		64	70	7	91		84	2	5	43					
8.1		64	113	2	101		63	7	8	36					

(2) 集合フェロモントラップへのチャバネアオカメムシ誘殺虫数は、前年同期に比べて少なめで推移している。

(3) 7月25日発表の1ヶ月予報では、気温は高い確率が60%、日照時間は平年並または多い確率ともに40%と見込まれており、発生助長の気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 果樹園周辺の雑木林から成虫が飛来するので、園内を巡回し飛来に注意するとともに、飛来を認めたら早急に防除を行なう。

(2) 夜行性なので、薬剤の散布は夕方か早朝に実施する。

(3) 移動性が大きいので、広域一斉防除により防除効果の向上に努める。

Ⅲ. 野菜

夏秋ナス

うどんこ病

1) 予報内容

発生程度：「少」、発生量：平年より少ない(前年よりやや少ない)

2) 予報の根拠

(1) 7月後半の巡回調査では、発生圃場率が11.1%、発病葉率が0.2%で、平年(37.2%、4.0%)より少なめの発生であった。

(2) 7月25日発表の1ヶ月予報では、気温は高い確率が60%、日照時間は平年並または多い確率ともに40%と見込まれており、発生抑制的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 窒素質肥料の過用を避ける。

(2) 落葉した罹病葉は適切に処分する。

(3) 病斑が進展し葉の表面が菌叢で覆われると、薬液が弾かれ防除効果が劣ってくるので、薬剤散布にあたっては、展着剤を加用する。

(4) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

アザミウマ類

1) 予報内容

発生程度：「少～中」、発生量：平年よりやや多い(前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

(1) 7月後半の巡回調査では、発生圃場率が66.7%、寄生葉率が2.9%、被害果率が2.2%で、平年(38.5%、2.6%、2.2%)より発生圃場率がやや高かった。

(2) 7月25日発表の1ヶ月予報では、気温は高い確率が60%、日照時間は平年並または多い確率とも

に40%と見込まれており、発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。葉表より葉裏への寄生が多いので、散布むらのないように丁寧に散布する。
- (2) 同一系統薬剤の連用は薬剤抵抗性獲得の恐れがあるので避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生程度：「少」、発生量：平年並(前年並)

2) 予報の根拠

- (1) 7月後半の巡回調査では、発生を認めなかった(平年同時期は発生圃場率が4.7%、寄生新梢率が0.2%)。
- (2) 7月25日発表の1ヶ月予報では、気温は高い確率が60%、日照時間は平年並または多い確率ともに40%と見込まれており、やや発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、防除の際には、葉裏に十分な量の薬液がかかるよう丁寧に散布する。
- (2) 同一系統薬剤の連用は薬剤抵抗性獲得の恐れがあるので避ける。

ハダニ類

1) 予報内容

発生程度：「中」、発生量：平年より多い(前年より多い)

2) 予報の根拠

- (1) 7月後半の巡回調査では、発生圃場率が55.6%、寄生葉率が21.1%で、平年(24.5%、3.1%)より発生が多かった。
- (2) 7月25日発表の1ヶ月予報では、気温は高い確率が60%、日照時間は平年並または多い確率ともに40%と見込まれており、やや発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。ハダニ類は大半が葉裏に寄生しているので、防除の際には、葉裏に十分な量の薬液がかかるよう丁寧に散布する。
- (2) 同一系統薬剤の連用は薬剤抵抗性獲得の恐れがあるので避ける。

秋冬ネギ

シロイチモジヨトウ

1) 予報内容

発生程度：「少」、発生量：平年よりやや少ない(前年並)

2) 予報の根拠

- (1) 7月後半の巡回調査では、発生を認めなかった(平年同時期は発生圃場率が36.7%、50株当たり寄生虫数が5.9頭)。
- (2) 7月25日発表の1ヶ月予報では、気温は高い確率が60%、日照時間は平年並または多い確率ともに40%と見込まれており、発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫の齢期が進むと薬剤の効果が著しく低下するので、発生初期に徹底防除する。
- (2) ヨトウコンーSによる交信攪乱効果は設置後3ヶ月程度で低下してくるので、早めに交換する。

ネギアザミウマ

1) 予報内容

発生程度：「少」、発生量：平年並(前年並)

2) 予報の根拠

- (1) 7月後半の巡回調査では、発生を認めなかった(平年同時期は発生圃場率が15.7%、被害度が0.3)。
- (2) 7月25日発表の1ヶ月予報では、気温は高い確率が60%、日照時間は平年並または多い確率ともに40%と見込まれており、発生に中立的である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

ネギハモグリバエ

1) 予報内容

発生程度：「甚」、発生量：平年より多い(前年並)

2) 予報の根拠

(1) 7月後半の巡回調査では、発生圃場率が100%、被害度が28.1で、平年(71.3%, 10.6)より発生が多かった。

(2) 7月25日発表の1ヶ月予報では、気温は高い確率が60%、日照時間は平年並または多い確率ともに40%と見込まれており、やや発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

(2) 被害葉は発生源となるので、絶対に圃場周辺に野積み・放置せず、速やかに処分する。

冬春イチゴ

うどんこ病

1) 予報内容

発生程度：「少」、発生量：平年よりやや少ない(前年並)

2) 予報の根拠

(1) 7月後半の巡回調査では、発生を認めなかった(平年同時期は発生圃場率が42.2%、発病葉率が5.5%)。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本圃への持ち込みを防ぐため、発生初期の徹底防除に努める。

IV. その他

1) 防除にあたっては、圃場をよく観察し、適期を逃さないようにして下さい。

2) 薬剤の使用にあたっては必ず使用基準を遵守し、周辺作物等へ飛散しないようにして下さい。

3) 水田に薬剤を使用したときは、7日間以上止水して下さい。

予報内容の表示

発生程度：甚>多>中>少>無

発生量：多い>やや多い>並>やや少ない>少ない

徳島県立農林水産総合技術支援センター病害虫防除所

テレホンサービス：0883(26)1199

URL：<http://www.green.pref.tokushima.jp/boujyosyo/>

○病害虫の発生予察情報、発生状況、防除法等をお知らせしています。